幻想世界クナウザス基礎事項注釈

（新暦以降・タラム梵子科学研究機関による統一見解より）

※本編は８Ｐより始まります

1、新暦までの歴史簡易年表

紀元前150億年　地球の下位次元宇宙とは捩れの位置に、高次元宇宙開闢・唯一惑星誕生、半球惑星に

紀元前45億年　クナウザス世界の区域限定・混沌の渦形成、

混沌期～紀元前二十億年　渦の内部で大多数の生物門出現、熾烈な生存競争

神話期～紀元前十億年　（ここまでを創生紀と称す）四大虚神に闇の虚神が虚報を流し、大戦争勃発

古生代～紀元前数億年　（至低紀などを含む）神話戦争停滞、代理戦争的な人種・民族同士の闘争

中世代～紀元前数百万年（浮島空紀などを含む）平均化進化、共存知的生物種の台頭

近代～新暦元年以降　低次元宇宙より入植軍来襲・クナウザスという世界名が初めて使われる

現代～新暦六百年以降　大陸間大戦後・踏破家集団の活躍・国際交易の活発化

2、梵子という概念について

量子、霊子、といった高度な概念・素子をすら凌駕する究極の絶対完全統一理論を構築する素子が梵子である。これは、物質や情報だけでなく、行為、意義、結果、因果、あらゆるものの『中庸』状態にある素子として認識される。次元レベルが低いほど梵子は『素化』という現象を起こして互いに偏重しながら収束してしまう（ゆえん低次元宇宙の地球上では蓋然であるが、それゆえ、非効率な努力の無理強いが制作用の強い現代科学なる虫禍を生んだ）が、クナウザスにおいては、高次的因果律の下、梵子がそのままで空気のようにふんだんに存在するため、これを利用すれば原理的には『指先一つでどんな願いでも叶えられる』はずである。これは、いわゆる『念』をデバイスとした『梵子術』や『梵子科学』などの要素として扱われている。なお、素梵子は『固化』する前の半熟状態なら別の利用価値があり、これをもっ

て独自の召還術を行使することを『素梵子他象』と呼ぶ。

3、アナケー発祥説について

本稿などでも紹介される歴史観が確固として存在するにもかかわらず、やはり絶対的根拠のある科学的事実として、後世の多少なりとも学のあるクナウザス人は同時並列的に以下のような事実を受け入れねばならない。『クナウザスは、不測の事態によって自壊してしまった、別のより有意義な世界の後釜として、そのブラックホール的な影響に引きずられ、ほんのちょっと前（新暦612年・学説発見時）に、この上位世界の上に捏造された世界である』。上位世界については、エルピースという唯一究極の知的生命体が生活していたということしかわかっていないが、それに由来する出土品（『無窮印』と呼ばれる）は少なくなく、特に学説の根拠が見つかったアナケー地方で多く産出される。

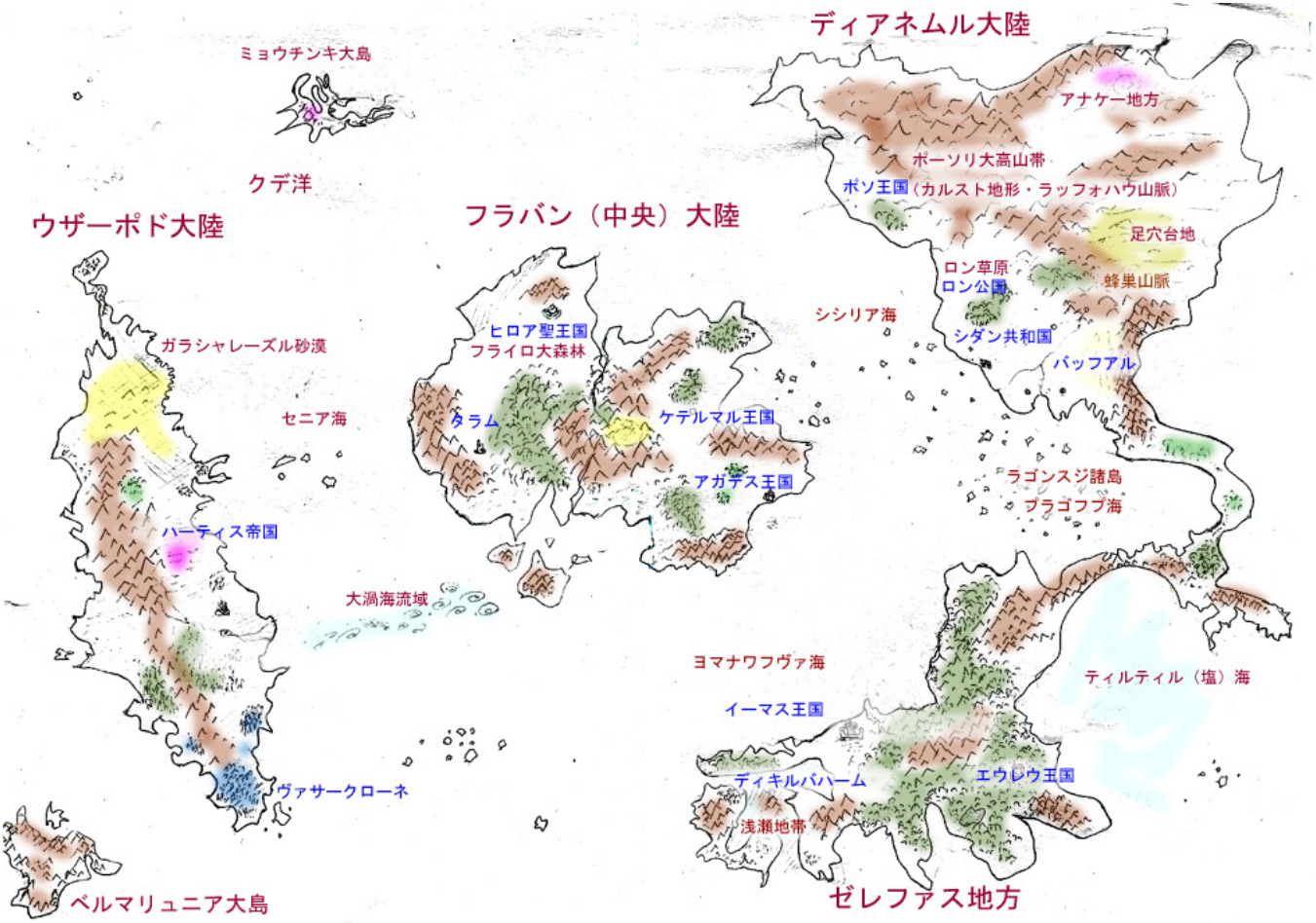
4、虚神と信仰について

終結へと向かっていた混沌の時代に事実上の引導を渡したのが『四大虚神』の誕生である。これは素梵子化した自然概念の基礎たる『地水風化』の各々のエナギーが独自の渦を形成し、さらに同系統の力を呼び集めて生み出された、一種一固体の、無限の生命力を持った超生命体である。神のごとき力と世界に対する影響力を持ちながら、目に見えて現存する生物的存在でもあるために彼らは『虚神』と呼ばれ、生物とも神ともつかない曖昧な位置づけに属しているのである。彼らの他にも5体の虚神が発生した。虚神の影響でクナウザスは新たなる機微を内在する世界へと急激に変貌を遂げていく。それに合わせ、兄弟的位置づけにある地球のような昼夜の区別や時間概念、天空を彩る星々が欲しくなった地の神を除く三神は、後付的ではあるが、これらを創世の仕上げとして付け足すべく、各々同時期に『天の虚神』を『空想』した（その実在は不明とされるが、神の（強い空想は現実に勝る意義を持つ）。地の神は独自に別種の子を宿し、大地を刷新する偉大な仕事を成し遂げた植物界の王

を『樹（草木）の虚神』に引き上げる。また、四散した混沌の渦の残り香が中央大陸に集結、四大虚神を始め、混沌期以降の世界を憎む『闇の虚神』となり、その反動現象として『光の虚神』も出現した。近代末期、この両神が対消滅したため、『無の虚神（最終神）』が現れる。他にもあらゆる神を区別なく一個のものとして考える『総体（相対）神』という考え方もあり、クナウザス由来でない人種の『人者種』が興した『創世主教』『命題教』『魔導王教』『努力神教』などの新興宗教に連なる。現代では、世界の四大を実虚神、それ以外を非実虚神と定義しているが、各宗派はそれぞれに独自の神学を持っており、あまり学術的客観分類を気にしていないことが多い。それ以外の土着的な信仰は『河童神』などと総称される。こういった虚神の存在と梵子や素梵子の流動経路、近年の別次元への扉は密接に絡み合い、術法や信仰とも深い因果関係にある。だが、あくまでも信仰は内的な宇宙に浸透することで外的な宇宙の理に触れることであり、信じる精神の素養や状況に左右されるものであるから、教義と神々の意識や意義が必ずしも合致せず、それどころか全く無関係なことすらある。

5、共存知的生物種（共知）

クナウザスでは生物の進化が早すぎるほど早く、後期になるほど退化的進化が進む（それにともない、世界様相は大雑把な変動の断続から機微の継続的波形に喩えられるようになる）。梵子を術によって利用する人類の中で、数種類が支配ではなく世界人類共存の概念とその手法を永きに渡る闘争の中からついに獲得した。これをもって現代の区切りともいわれる。『平均化進化』はその功罪的現象であるし、遺伝的に異なる種族同士が子を得られる『授子の儀』の確立こそはその主柱である。このような高次元的世界の『日常』を覗くことは、それ以外の世界に住む者にもある程度の有意義な見聞とはならぬまでも、慰みくらいにはなることであろう。



※ クナウザス世界地図（現代）

種族名称		5段階評価											
		腕力	物理防御	対気防御	気子力	知能	念力	生命力	敏捷性	器用度	術具容量	耐久値	合計
特徴・能力							容姿・性質						
種の保存・発生起源													
指者	ヌンマラー	3	2	2	3	4	3	3	3	5	3	3	**34**
指が多くあり、非常に器用。脚が腰の真ん中に一本だけ。足底は無機質的で、滑るように移動するため、地形効果を受けにくい。耳が無いが、体全体で聴ける。寿命は人者(後述)と同じだが、病気には強いし老いにくい。万能で生殖能力もバランスが良い。角のような構造で気子力を探知できる。							体毛が全くない。体色は様々(先祖の魔族による)。超優秀なカツラが服と同列に扱われる(クナウザスに売の恥は無い)。個体差が激しい。人口第一位の知的生物。						
温沌期の魔族を祖先とし、世界中で様々な人種に進化したが、12本指の種族が優勢となり、最近ではほとんど同一系統である。													
稼動気	ファクフルター	2	4	2	2	3	3	4	2	3	3	3	**31**
変形能力(極端なものは不可)。ゆえに防御力が高い。応急的に代替細胞手当てができるので、生命力が高い。寿命は人者と同じ。訓練しないと変形能力が著しく低下するため、一般民衆はあまり他種族と変わらない。							人のような平均容姿から他種族のような姿をランダムで取らされるが、不定形にこだわることもできる。高齢になっても比較的老いを隠せる。男女別は見かけと性質だけ。						
単細胞生物の特質、気体生物などの無形性などが概念として引き継がれている種族。温沌時代の凶悪なウィルスなどから発生した『悪寒気』族の奇形として生まれ、狡猾さと変身能力が弱く、虐げられていた。だが、社会的種族の台頭で立場が逆転していった。【特殊生殖】性別が基本容姿や性質(これは男女の別)以外に4つあり、それぞれがある時期に一定範囲に偶然でも集まると、勝手に分裂が始まる。儀式を行わなくても、これは確実に両親の性質を受け継ぐ稼動気になる。姿は相手側に近い。分裂後しばらくは魂が形成されないため、破棄してもかまわない。													
砂魚者	ザントシュヒマー	4	4	2	2	3	3	3	3	3	2	4	**33**
砂や泥に潜れるが水泳は普通。戦士としての能力が高い。好奇心が強く、努力家が多い。食あたりに強いので食事に困らない。病気に強い(ガン以外)。再生能力有。寿命は70歳くらい。老いても能力値が下がりにくい。							少し背が低いが、がっしりした体格。平均化進化の影響を強く受けている種の一つで、最近では個体差が激しく、人そっくりのものも。髪や皮質は鱗のような感じ。						
初の脊椎動物として魚類が海から陸へ上がった功績が、クナウザスで人種として結実したもの。神話期の海洋で生まれ、能力の低い魚だったが全く不得意な砂漠へと犠牲を払いながらも進出し、進化を勝ち得た。その後風神の従者として暮らしており、数はそんなに多くないが、近年では各地に進出している。													
虫者	インゼクター	3	3	2	3	3	2	3	3	2	3	3	**30**
額の3つ目に遠視能力有。腕が一対多く、装備が多くできる。雄は喉に縦諧羽があって歌に術力を込められる。雌はバッタのような細い足でジャンプできる。また、乳房が3つある。寿命が長くても15年ほど(大人として覚醒してから)だが転生が容易。							特殊能力分以外は人とほぼ変わらない。特別美醜なものは少ないが、皆それなりの個性を持って相手を惹く(種の保存のため)。成体のみで、老年や幼少期(虫)はない						
質より量的な、無脊椎動物の花形である昆虫類の概念を引き継いだ種族。【特殊生殖】恋愛などをした際(片思いでもよい)に、稀に、その二人の性質を受け継ぐ魂が虫の卵に宿ることがある。これを古い虫の一族が回収して育てると虫者になる。転生はこのシステムを利用する。しかし、こういった『純粋』の虫者は古い一族の過疎化とともに近年激減している。儀式で生むと、虫が出てくるので最初は驚くかもしれない(しかも凶暴な場合もある)が、段々知性もつきはじめ、数年で『脱皮』し、成人した人型になる。													
樹曼	バオマー	2	3	3	3	4	3	3	2	2	4	4	**33**
植物系専用術法を多数習得可能。対植物攻撃に弱い。光合成や土からの摂取で生き延びられる。寿命は100歳くらいだが、数千年など、老いつつもさらなる長寿もありえる。老いるほど植物部位の割合が多くなる。老いを嫌がって自ら土に還る儀式を行う者も多い。独特の哲学を持つが、ほとんどが穏やかで知性は高い。							性別がないので中性的なもの(オカマではなくて、中性)も多い。かつては樹木に近い姿をしていたが、近年では平均化進化の影響で外見上は人者と区別がつかない(しかし皮膚の中は植物っぽい)者が多く、別種として分類する人類学者もある。その場合でも、植物的な部位が体のどこかにくっついている(個体による)。						
世界自然環境を支える生産者としての功績がクナウザスにおいて結実した種族。樹神には彼らの僧正中で最も優秀な者が(神が転生したとして)選ばれる。【特殊生殖】自分を死んだ後に埋めたところから生えた植物(魂株)が稀に樹曼になることがある。ただし、その性質や能力、記憶は全く親と連結しないオリジナルである。(付近の土壌や虫の媒介も関係するらしい。これは故人には寂しいかもしれないが、種としては遺伝的刷新ができて良いことかもしれない)いずれにせよ、そこから生えた植物に成ること、それだけでなく土に還るということが彼らにとって転生以上の極楽浄土である。													
猫者	カッツァー	2	2	2	3	3	2	3	5	2	3	3	**30**
ひたすらに素早い。しかしその他能力値に秀でるところはない。爪や牙も武器として鍛える。人口は多くない。ごく稀に遺伝的に突出した個体が生まれることがある。寿命は人と同じくらいだが病気に弱い。早く成人する。古い名残として雌の幼体には7対の乳房があるが、これだけは平均化進化のため、成体になるに従って一対に減る。							成体になってもほとんど猫そのものの姿。幼少期は猫であり、人語を解さず、猫同士でしか喋れない(個体差があり、優秀なものは可能な場合も)。性格は独特だがあらゆる種族に受けが良い。ムードメーカーとして、なんとなく仲間に溶け込んでいることも少なくない。						
平均化進化現象も何のその、元来の祖先の姿をほとんどそのまま人類種として引き継いでしまっている唯一の種族としては興味深い。この特別扱いは能力云々よりも何か別の趣向？が働いている可能性も否定できない。5億年前ほどに犬者の祖先などから派生したらしいが、定かではない。													

※共存知的生物種（現代）

種族名称		5段階評価											
		腕力	物理防御	対梵防御	梵子力	知能	念力	生命力	敏捷性	器用度	術具容量	耐久値	合計
特徴・能力							容姿・性質						
種の保存・発生起源													
飛竜者	ﾄﾞﾗｯﾋｬｰ	2	2	2	3	3	2	3	4	2	3	3	29
羽の先に手がついているだけなので武器装備は弱いが、尾や脚は強い。訓練次第で飛行能力が身につく(鳥のようにはいかない)。毒の実に耐性があり、唾に混ぜて吐く攻撃も可能。寿命は60歳くらい。幼少期が死にやすい							始祖鳥のような姿だが、翼があり、男らしく誠実な人格が多いため、他種族の女性に人気が高い。9割男で、女性は女王や巫女として担がれる。					
神秘的な存在である恐竜より進化したとされ、翼持つ美しい種であり、次代の地球人類種候補であろう？と思われる鳥類に敬意を表し、クナウザスに顕現した種族。【特殊生殖】雌は儀式(古い集落にのみ残る)によって卵を大量に生み出し、たくさんの子を残せる。ただし、生まれるもののほとんどは鳥や翼竜であり、ペットや家畜としての価値しかない。このような女性は大変だが、村では全力で生涯大事にされた上に死後も神としてあがめられる													
瘤取者	ｳｭﾙｽﾄﾈﾏｰ	5	3	3	4	3	2	3	2	2	3	5	35
体がごつごつしていて筋肉質、大柄な上に瘤には梵子力を膿のように吐き出す汗腺があり、基礎能力値が高い。元巨人族。寿命は40くらいだが、いつまでもゆっくり成長を続ける(後期は老いと成長が同時進行する)。							多少魔物の風合いが強いが、それを格好良いと思えるなら魅力は高い。とにかく強いのでゲーム的？には一人は欲しい。					
人をモデルにしながら普通の人に非ずという巨人族の特殊性から端を発した種族。その派生は諸説あるが、共知人種の中では一番古い血統ではないかと思われる。													
雪聖	ｼｭﾈｰﾊｲﾙ	2	2	3	4	4	4	3	3	3	3	2	33
目が中央に一つしかなく、読心術ができる。また、そちらの耳が両方とも長く、訓練次第ではかなり遠方の音を聞きつけられる。雪に埋もれても生きられる反面、暑さに弱い。接触や息で物を冷やせる。寿命は150歳、100歳以降で老いが始まる。成体になるまで時間がかかる。							小柄な人、といったところ。ちょっと不気味な感じもするが、美形が多いので悪しからず。7割は女性で、海を渡った火神に使えるカザリフビー族は飛竜者に人気があったようだ。					
幻想世界には欠かせないいわゆる妖精といった概念を引き継いでいるが、クナウザスでは素梵子儀式より創られた人種として異彩を放つ。この発生起源のために生み出した水女神の力に偏っているが、知性が高いので術法や学術なら難なくこなす。													
人者	ﾒﾅｰ	3	2	2	2	4	4	3	3	3	3	3	32
無し。それが良かったりするのだろうか。寿命は50歳くらい(クナウザスでは回復手段も強いが病気も強い)							モデルは猿で、個体差が激しいが、平均容姿そのもの。そのおかげで他種族に違和感なく混じれたのかもしれない。この時代にはまだ存在しないが、著述の原稿が現代だと、平均容姿などの関係で引き合いに出されることが多い。					
地球の超未来、地球人類は科学力によって自然環境を破滅させたが機械の中で生き残り、仮想現実にユートピアを見出し、『神』となった。そして、現実の地獄を世話する物として、無機物質から実験室の中で人間と同じ人工生命体を大量に作り、『天仕』として奴隷のように扱う。別次元に共時的に浮かんでいたクナウザス世界を発見した『神』は、その支配を目論み、自由を与えることを約束してこの世界を開拓させるべく、奇跡の子『天子』を派遣、中央大陸に超巨大大量転移建造物『天を突く塔』の建設を命じる。彼らは『人生』を得るために、クナウザスの生物群と争い、和解の道を見出す(入植戦争)。――この後、『塔』は封印され、天仕達は人者を名乗って住み着く。後の世界新暦ではこの辺りを元年とする。													
森者	ﾊﾙﾀﾞｰ	3	3	3	3	5	4	3	3	3	3	3	36
不老不死に近い。人口は多くても世界で数百人とされる。類稀な知性を持つ。天子は実験室版の森者というところであろう。この種は天使と天仕の子として、ごく稀に発生したようだ。							人者と同じだが、美麗な個体が多い。この時代には存在しない。					
天使と呼ばれる、異次元入植軍の半機械兵士が、天仕と交わって得たハイブリッド。天使には本来感情も生殖能力もなかったため、クナウザスの梵子的環境が作用したものと思われる。ちなみに、生物として子孫を残したいという欲求に魔族が付け込み、子を得たのは堕天使と呼ばれる強力な悪鬼となった。特例として、儀式を行っても森者の子を残せないので、森者同士で交わるしかないが、そうすると遺伝的に近縁すぎる問題が。不老不死にもかかわらず、種としては滅びる運命にあるのだろう。ゆえに古い者達は閉じこもりがち。													

※登場人物一部紹介

カーン・アルプ
（人者、30歳、男）元帝国黒騎士だが、
アーテルの兄フィルと旧知の仲で、
彼を通して踏破家になる。厳しい一人旅の
中で死線を潜り抜けながら培った剣技は
いつしか大陸中でも右に出るものがいない
ほどとなったが、恋愛沙汰には疎い。

アーテル・ネゼス
（人者、28歳、女）踏破家としても
創世主教神官としても、戦士としても
優秀な才色兼備で、多忙。ある冒険で
出会ったユーリの才能を見抜き、
踏破家業に引き入れた。

ユーリ・フォーシス
（人者、29歳、男）異世界から転移
に失敗してクナウザスに迷い込み、
数年前以降の記憶が一切ないが、
気にせず踏破家として大成功を収め、
自分の居処屋を持つまでになった。
心術と身体能力、判断力が並外れで、
強力な個別系虚実体『一角獣の騎士』
を操る。『準なる甲羅』のリーダー。

望郷に胸を張れ

ゆにあ

深夜をすぎてようやく、客と仕事の同僚を兼ねる連中は『泡沫の園』（冒険業を生業とする路破家相手の商売をする『居処屋』の一つで有名店）の店内から姿を消し、フロアには店主と小間使いが3人、それに厨房で後片付けをする若い衆が二人いるだけとなる。離れの事務所では主任のカストール・ナザルスが今日も難しい顔で大量の清算処理と格闘しているのだろう。他の例に漏れず、店の日々の心臓部となっているこの区画だけでも、いくつもの梵子技術品を見出すことができる。ちょっとしたレジスター代わりの『両断機』も、原理応用で目的を果たす低次元の『科学』技術とは全く派生を異にする、目的そのものをフレキシブルな物理力として操作する梵子術とそれを可能にする高位次元世界の盤石の賜物であり、その意義を知らずに、物語を見上げるようにしている下位世界の我々が『中世的だ』と笑えば恥を曝すことになろう。このような便利な品を行使する機会を与えられている店など、ましてやこんな個人経営の店では全く少ない事例ではあったが、おかげで、この砂魚者の事務責任者は多忙ながらも一人でほとんどの職務をこなすことができている。

少なくとも今日のような定期決算の日は——すでに徹夜を覚悟しているカストールは事務所に朝のための布団を用意している——事務所に店長の助けが必要なのであるが、ユーリ・フォーシスはなかなかフロアを離れることができなかった。彼は、指者と近縁なのではなかろうかと思われるような細く器用な指で小さなモノを転がし、吟味している。緑色のごつごつした小さな石を溶解させて繋げたような、複雑な骨組みによって立方体状になっている小さなこの謎の品物を、『バン・ト・ルケッド』なる名の遺跡から掘り出してきた踏破家団『虹つかむ虚空』より、彼はとりあえず二千粋（国際協定で世界通貨とされた）で購入したのであったが、どうもそれが気にかかり、あともう少し、と思いつ

つカウンターにへばりついていたのだ。

ほんの一瞬見ただけで、鑑定しきれていないうちに彼がこの謎の小品の購入に踏み切ってしまったのは、発見者の踏破家の話で、どうもこの品には何らかの危険な呪いがかけられていて、なるべく早めに処分してしまった方が良いだろうという結論に達したからであった。自身も現役踏破家にして居処屋の店長も兼ねるユーリは、梵子技術による品を店内に惜しみなく用いていることからもその利便性をよく理解していることはいうまでもないが、だからといって陶酔し、コレクターになっているわけではなく、あくまでその機能を自分の責任の元に利用しているにすぎず、これらの品の恐ろしさをも重々に実感している。彼は一種の本能的な使命感から、危険な品を見つけるとこれを即座に買い取り、しかるべき処置のとれる研究機関などに売り渡すことが常であった。彼が正義漢であるとやたらに強調する気はないので一つの事実を参考程度に述べるならば、――このような活動が邪悪な利用法を有する梵子技術品の悪用を防ぐ効果は全く無視しがたいものであるから、志を同じにする活動を行っている店は、国家や隣国の学院都市に『良質店』として評価され、支援を受けることになっている。その他にも、どんな品であれ、職業的な面で、自分の知識の糧とする価値はあるということもあるだろう。

ともかくもこの不気味な緑の塊を手に入れたユーリは、いつもは少し見れば大よその検討か、少なくともいくつかの仮説が立てられるのに、この品に限っては何一つ、どのように使うのか、何のために使われるのか皆目見当もつかず、果たして本当に危険な呪いなどかかっているのか、ということまで危ぶまれ始めていた。彼はふいと決心をつけて品を棚の鉄箱の中にしまうと、大欠伸を一つ、興味による興奮で後ろ髪ひかれているのを自分に隠すような仕草をして、一方本気で眠くなって欠伸をかみ殺す虫者の少女には適当に片つけて帰るように指示し、事務所に繋がる廊下に向かっていった。

舞台だけは動かさず、物影に潜まり、時を刻む針が円盤の上を廻るのをしばし眺めやっていると、ふと我々は、向こう側の階段から、こちらと同じく闇に身を潜め、昼間の喧騒を束の間の休息で否定するように静まりかえる酒場内を覗き込んでいる、灰色の目玉を目撃する。二つの目玉には度胸が無くて、きょろきょろしていたが、つい

には緊張に欲望が打ち勝ち、するりと中に入っていった。店内は天井にうっすらと張られた、不気味な印象を与えないように配慮されている安息色の蛍光苔が控えめに活躍し、照明を落としてもある程度視界が効く。

目玉の正体は人者のひょろっとした男であった。彼は軽快に障害物をかわしながら目的のカウンターにたどり着き、店長が例の物を格納した、棚の高い段にある小箱を背伸びをして迷わずに手に取った。彼はすでに冷や汗を喜びの興奮に変えていたが、取り外すときにごとりと僅かな音を立ててしまうと途端に萎縮し、腰を折り曲げてその中に箱を抱え、頭と下唇をこれ以上ないほどに突き出して眉間を吊り上げ、目には涙さえ浮かべている。

この、物語の中心的な舞台に恐らくは不届きな方法と目的で進入してきた盗人であるが、名をレイ・ジャーロンといい、ヒト科にしては四十一年という長い時間を生きながら、まだ何一つまともな満足を得ていない完膚なきまでの俗物であった。客として何食わぬ顔で宿を取り、内部に潜入して機会をうかがっていたこの男は、人殺しのように邪悪なのに度胸と実力がないために潔白であるような人種であったから、悪魔にさえ蹴り飛ばされかねない。これっぽっちの人間が、あの若いながらも踏破家としての成功者であり、時として間の抜けておどけた様子を見せることすら単なる愛嬌として捉えるしかできない切れ者の店主の領内を陵辱するなど、果たして考えにくいことではある。この店は様々な客を喜ばせる能力を有しているにもかかわらず、防衛力は並以下でしかないのであろうか。いうまでもないが、そんなはずはない。この店は高級なものだけでなく、用法を間違えば劇薬や危険物になるようなものもその資格を有して取り扱っているのだから、自衛は義務ですらある。店内には様々な形に模された同様の機能を持った仕掛けがいたるところに設置され、マスターのユーリ・フォーシスが簡単な儀式――外に出る前に手で法印を切る――を済ませると一斉に『警報梵分子』を吐き出す。それは店内に充満して漂い、空気のように無害であるが、店内でユーリが想念した『好ましくない事態』が引き起こされた時点で急激な化合反応を見せ、激しい音を立てる。このように、曖昧な望みを直に実現できることも、梵子技術ならではであろう。この完全な意味での警報装置に加え、巡回型の小型監視機械生物を『飼って』いる。

それにもかかわらず、まだ自分が誰にも気づかれていないことに安堵して起き上がり、箱を開けようと針金を鍵穴に差し込んでいる曲者は、これらのセキュリティシステムを難なくすり抜けているのである。それはこんなこそ泥ごときの実力ではなく、彼の持つ小さな円盤の機能が発揮されたことが原因である。レイ・ジャーロンの手より少し大きいくらいの石のような材質のそれは、鈍い光を放ちながらゆっくりと勝手に廻り続けるので、手放すわけにはいかない代物だけに、持主は肌身離さぬのにすら難儀していた。この、盗人の唯一の武器は、中央ほどに盛り上がって凹凸がつき、その反対の面には様々な梵子言語が書かれ、回転と同じ速度で一文字ずつ光っている。

レイはこの価値ある品の機能、その利用法を自分で知ったわけではない。まったくひょんなことで、彼はこれを安値で手に入れ、しかも売り手より、この品が『泡沫の園』の警報分子を無効化できるということも教わっているのである。彼はこのことを、今まで運が無かった分が廻ってきた、くらいにしか考えていない。ある面では幸せな程、盲目的に愚かなのである。

「あの野郎、全く良いものをくれたもんだぜ。さて、お宝ばかりだが、俺はおいしいものから先に食う性質なんでね…！」鉄箱には不幸にも簡単な錠しかついておらず、レイ・ジャーロンでも難なく開けることができた。彼は昼間の下調べで、その日最高額で店主が購入した品が、この箱に入れられていたのを黙ってみていた。

「あのうろちょろする奴がいない今日こそ、最大のチャンスだ。こいつだけでもしばらく遊んで暮らせるぜ」口惜しくも曲者の言う通り、店内に自分が覚醒しているということが店主を油断させ、指定された場所で人影を見ると例え店主であろうとも捕獲しようと迫ってくる仕事熱心な番犬のごとき巡回駆動機を起こしていなかったのである。

盗賊は蛍光で見透かそうと、入手した小物を掲げて必死に睨みつけたが、ユーリの慧眼ですらわからぬものを彼に僅かでも理解できるはずもない。彼はこんなものに高い金が支払われるということに納得がいかず、実感のこもった満足も得られなかったので、まずはそれを床に置き、他のものもできるだけ物色し、価値が高くて持ち運びやすいものを見繕うことにした。座り込んで鉄箱の中身を吟味していた彼は、棚を見るために立ち上がったが、すぐにはっとして目を丸くし、既に手に入れた床の品にか

がみこんだ。何か、僅かに動いたような気がしたのである。

「気のせいか…　ふふ、俺としたことが、気が高ぶっているのだ。無理もない。ヒロア広しといえどの名店、お宝がざくざくある所に来ているのだ。踏破家は無と危険の中から僅かな宝を集めてくるが、俺のような職業に比べ、なんと非効率的なことだ。あいつらは、俺の下僕、俺のために働いてきたのさ」彼は頭を振ってまた起き上がろうとした。しかし、そうしただけで、彼の顔は先ほどより謎の品に近づいた。左目を細め、右目を大きくして。

「なんだ、なんかおかしいぞ…」レイは、彼が何度も小さな異変に気づかされている不明瞭な現象が、この品の価値を見定めるヒントにでもなるかと思っているだけである。すなわち、彼はこの品があまりよろしくない曰く付きであるなど全然窺い知らぬのである。視覚を完全にはしてくれない照明の元ではまともに色を判別できなくなっているので、小さな立方体状の骨組みは黒っぽい塊にしか見えない。今やその骨のいくつかがぽろぽろと小さな音を立てて粉を吹きながら崩れ、形を保っている部分の断面から、この骨格が空洞のパイプみたいなものであることがわかった。レイ・ジャーロンは仰天しながら、パイプの小さな穴の中から小さな白いミミズか液体のようなものがヌルリと出てくるのを見守った。それは別々の穴から、二つ這い出してきて、それ以上は出てこなかった。彼は驚きで、立ち上がることもできずに、思わず手を後ろについて後じさりした。白い小さなナメクジのような生き物が、彼に近づいてきたのである。と、一匹がぴょんと跳ねた。

　壊れた贋物の中に住みついていた幼虫が健気に自己主張しているようにレイは感じ、幻滅した。ついで、冷静になり始めるとともに自分が虫ごときに怯えたことにも無性に腹が立ち、これを踏み潰してやることにした。なにも、お宝はお前だけではないのだ…！

『やめたまえ。無事に、『夏と川を燃やす披露宴』へ我等を連れてゆくのが、汝の使命なり』

　足を上げた途端、聞いたことのない声が、知らない言語なのにその意味をはっきりと理解させられながら、レイ・ジャーロンの頭の中に響いた。途端に、彼は激痛によって体の自由が利かなくなり、目の前が電光で一杯になったように感じた。彼には転

倒して木の棚の角に頭をぶつけたこと、大声で悲鳴をあげたことすら、本当のことかわからないくらいだった。だから、彼が二人の男に抑えられたときも、しばらくはそれが夢のことであるとしか思われなかった。

修羅場の事務所は尋問という別の圧迫感を取り入れていた。ユーリは盗賊の持ち物であった円盤を接収し、半ば考え事で呆然としながらこれを指でコツコツと叩き続けていた。援護者が離脱してより一層苦しくなったカストール・ナザルスが苛立ちの咳払いをしたため、貧乏ゆすりのような音が止まった。店主は、自分の考えているよりも店のセキュリティが甘かったということよりも、店が何者かに『攻撃』されたという事実を思案している。

彼はレイを視線の圧力で促し、事務所の隣の、物置小屋に連行した。入り口から左手の壁に掛けてある燭台に明かりを灯し、自分は埃をかぶった廃棄待ちのソファに腰を投げ出し、被疑者をへし折れそうな木の丸椅子に座らせると、移動の間も目をほとんど離さなかった石の虚品（キョンチ。梵字技術品のこと）から顔も上げずに問うた。「誰から買った?」

「…え、いえ、その、バンケフの港で… よくわからない奴で、名前も知りませんが、声をかけられたものですから…」レイ・ジャーロンはびくびくしながら言葉を選んだ。能力の高い踏破家とは、立場的な権威だけでなく明確な意味での戦闘力、すなわち暴力的な権威という方面においても申し分なく持ち合わせているものだから、脅しが一切洒落にならないのである。

「なるほど、名も知らぬ奴からこんな品を買ったのか… ご大層なご身分のようだな。そんな金があるなら、俺の店でも金を使ってくれりゃぁ、こんな面倒にはならなかったんじゃないのか?」「お待ちください旦那、たったの百粋なんですよ、それだけで、何十万、何百万するかもしれないこの店の…」

レイ・ジャーロンはここで、例のごとく目を丸くし、下唇を右に歪ませつつ突き出し、顔を青ざめさせた。顔を上げたユーリの目が、決してやくざな印象を与えはしないが、心を見透かし、凍結させるような凄みで差し向かいの男を射抜いたのである。裁定官は重そうに唇を動かした。「それで、うまいことやろう、とな。俺もこれ見よがしに富豪の振りをしているつもりはなかっただけに、残念だな。まぁ、一つ確実にい

えることは――あんた、俺の店と知らなかったわけでもなかろうし、けっこう良い度胸しているよな」

窃盗未遂の罪に問われる囚人は、ヒッと喉を詰まらせて短い悲鳴をあげた。突如、熱の無い指先が彼の喉元に触れたのである。その異様な雰囲気が、虚実体（素材：他者の術で召還された存在）『一角獣の騎士』がいつの間にか発現し、レイ・ジャーロンの背後に立っていることを、振り返るまでも無く彼に教えた。このユーリ・フォーシスという術者独自の虚実体は腕や手という部品がないが、それ自体がこの虚実体の能力、『現実と非現実の境界を壊す』ということの象徴であるから、無いはずの腕による行為と結果だけが生じ、そのときだけ、間に合わせの事実を埋め合わせるかのように腕や手のようなものが視覚化する。

ところでレイはこれほどはっきりと間近で虚実体を見たことがなかったので、怖がりが幽霊を見たかのように、ブルブルと顎と下唇を震わせ、先ほどから気になり始めていた瞼の痙攣も顕著となった。そんな彼を白い馬面の虚実体は無遠慮に覗き込み、自分を操る宿主の顔と代わる代わる見比べている。「どうしますか。いつでもへし折りますが？」と伺いを立てるように…

この様子を、犯人と尋問者を隔てる机の上にひっそりとして動かない二対の白い物体、もしくは生き物が見守っている。ここにレイ・ジャーロンを連れてきたとき、ユーリを悩ませた品から這い出てきたこの小さな連中もその後から当然のごとく、ひょこひょことついてきたのである。ユーリもまた横目でこれらの反応を気にしていたが、特に目立った動きは今のところ無いようである。ただ時折どちらともなく、体の半分を持ち上げたり、また寝転びたりする。どちらがどちらとも、彼には全く見分けがつかない。

ユーリ・フォーシスは盗人に穏やかな口調で威圧的な質問を浴びせていった。心術能力に長けたユーリに対して嘘をついても全く無意味で、自分の立場を悪くしていくだけだということを理解するには、犯人がいくら愚かであろうも大した時間を必要とはしないであろう。だが、事情聴取は事の性質上どうしても罪の追及より事態の把握に重点が置かれ、時折レイ・ジャーロンはさながら情報協力者のように格上げされたかのような錯覚を覚え、調子に乗って青年に睨まれ、すくみあがるといったことを繰

り返した。
「それで、こいつらは？　これが呪いの品だということは承知で、お前はこいつらを呼び出したのか」
　レイ所有の盤状の器具について2、3の質問をした後、ユーリは白い芋虫どもを突然指差した。興味が無い振りをして様子を伺っていたのだが、全く動きに変化が無いので埒があかないと踏んだらしい。芋虫の解放者は事の次第を隠さず話した。呪いの件は全く知らなかったし、不幸中の幸いにもそれは不発に終ったようであるが、例え鑑定が間違っていてこれが全くの紛い物であるとしても、自分としてもこのような正体不明の生物が出てきたことは非常に興味深いことであって、謎の解明にはどんな協力も惜しみません、などと要らぬことまでも述べ立てて手を胸の前で組み合わせたりしたものだから、案の定、虚実体から脳の中身を抉られるような――事実、『一角獣の騎士』がレイの頭を小突いたとき、確かにその手は頭皮から下にめり込んだように見えた。それが事実か幻かは不明であるが――身の毛もよだつ体験を頂戴した。
『無視に飽いたのな、ようやく』自分達のことに話題が正式に向けらるのを待ち構えていたかのように、虫の一匹が冷ややかに言い放った。
『自己紹介をさせていただこうか、これから世話になるのだから』もう一匹が、相方の方に体をよじらせて言った。ところが、最初の奴に話し掛けられたユーリのほうは、眉根を潜めて突然の、しかし待ちに待った異常の発現に見入るだけだった。
「何だって、話せるのか。何語だ…？」彼はまるで、これを連れ出したこそ泥にこそ芋虫の言葉を全くわからなかったことの不快について責任があるとでもいうような調子でレイに尋ねた。しかし彼にも全く何のことかわからず、ただ首を振るばかり。そうこうしているうちに、虫どもはかまわず喋り散らしている。これほど小さいのに、囁くような音量ではあるが、確実に発声しているのである。
「いや、旦那、確かに、あっしがこれを見つけたときにこいつらは何かを喋ったんです。そうだ、川がどうのこうの、とか言っておりましたよ。もちろん、あっしにも何のことかさっぱりでしたが」レイがユーリの質問の意味を取り違えているので、話がかみあわなくなっていく。虫がまた何か話した後、レイ・ジャーロンは、自分が最初に聞いた言葉は『夏と川を燃やす披露宴』という建物の名であった、確かにこいつら

の言うとおりで、自分はそのように聞いたと大げさに何度も頷いてみせた。それを見ながらユーリは全く別のことに合点していた。

「お前、連中の話がわかるということなのか。まともな言葉じゃないが…　さて、フィルを連れてこなくちゃならんが、その間はアンタが通訳になれよ」

店長の指図で、レイはぽかんと口をあけて席から半ば腰を浮かせたが、間もなく事の次第が飲み込めた。別にこんなしがない盗人が特別な言語知識を持っているはずも無い。彼には全く普通の言葉にしか聞こえないし、ユーリが彼等の話を聞き取って皆目理解することができないということ事態も、なかなか実感できることではなかった。しかも、それができたからといって、彼には優越感を多少なりとも感じるわけにはいかなかった。『呪い』という言葉が胸に去来し、事態が彼にとって異常な方向へ、ただ窃盗未遂を働いて叱られ、没収され、牢屋にしばらく入っていれば済む問題が、より一層の困難に向かっていくような嫌な予感を得ていた。しかも彼には珍しく、それはずばり的中しているのである。蟲達の方でも言葉が青年に通じていないことが判ったのであろう、レイにのみ話し掛けるようになってきた。

「汝独りでは無理であろう。あの男のような、一見して優秀と判る者の協力が不可欠なのだ。汝のような単純な精神を持つ者は、彼等と話すための格好の扉であるということなのだ」

「そうだ、自惚れなさんな。かといって卑下しすぎると体に毒であるよ」

こんな調子で、2匹が代わる代わる話すのを聞きながら、レイはユーリの顔をちらと見たが、先ほどまで優位に立っていた尋問者は今や部外者となって首を振り、彼の通訳を待っている。事態は悪い方向に進んでいるかもしれない。だが、それさえも利用するのがこのレイ様よ…、とレイ・ジャーロンは内心の笑みを隠そうと必死になり、謹厳と不安を装った。虫達が跳び跳ねる。

「汝のごときが要らぬことを考えるでない。あの男を本気で騙せるとでも思っているのか?」「そうだ、やめろやめろ、やめておけ。あの男を怒らせても我々に良いことは無い。あの男は人のよさそうにしていてその実騙す方が得意な部類の人間だ」「むしろ協力を求めるべきなのだ。従順にしておけ、我々に対するように、大人しく…」

「うるせぇ！　指で潰すぞ、蛆虫どもめら」

終わりの叫びはレイである。心を見透かされ、しかも偉そうにされているのが癪に障ったのだが、その大声にも動じず、青年と虚実体が見下すようにしているのに気づいて急いでぺこぺこと自分の非礼を謝った。

「いえ、何と言うこともないのですよ、旦那様。こいつら、呪いの力でこの店を支配するなどと言っているので、こいつらの言葉を唯一わかるこのあっしが、一喝してやったという次第でして。まったく傲慢な連中です。ほら、私の権力で萎縮はしていますがね、しかし、呪いの力は侮れません。こいつらの話を信ずるなら、ですが、あくまでも。いえ、お察しのとおり、無論こいつらのブラフかもしれませんよ。しかし、最悪の事態を想定して対処しておくなら、どうでしょう、私が一つ、知り合いの占い師、こういう蟲には人一倍詳しい虫者のパルクフィーという男なんですが、兄弟分みたいなやつで、そいつにですね、聞いてみましょうか。お許しさえあればですがね。いえなに、礼にはおよびませんよ。まぁ、今回のことは私にも良い薬になりましたし、かえってこの件で偉大な踏破家の方とお近づきになれたり、そのお役に立てれば私としても至極幸いというわけですし…」

レイ・ジャーロンは自分の舌がこの大事な場面でよく回ることに気を良くし、白虫達が彼を否定して飛び跳ねていることにも気を止めない余裕があった。ところがユーリは一切表情を変えず、この際無駄な時間は使いたくないので、単刀直入に、ただ事実だけをこう述べるに留めた。「こいつ（ユーリは虚実体の肩に手を置いた）でも人の心を覗くような野暮はしないが、お前の言うことが嘘か本当かということくらい、見分ける方法はいくらでもある。バカなことは一切やめたほうが、より一層自分の立場を危うくすることだけは最低限防げるというものではないのかね」

虫達がやんややんやと大騒ぎし、素梵子他象術者と、彼の代わりに首を傾げて小さな生物に注意を払いつづけている虚実体に同調する。言葉がわからなくても、ユーリが彼等と同じ意見であったことが雰囲気でわかったらしい。それでもしばらくレイ・ジャーロンはあきらめきれず、あくまでもそれが優れた踏破家らしいハッタリであると考え、しどろもどろになりつつあったが、必死に平静を装って話のすり替えを試みようと空しい努力を僅かにやってみた。無論、様々な経験と持って生まれた勘の鋭さによって作られるユーリの眼光はその色を微動だにも変えようとはしなく、彼の堪忍

袋の尾が切れる寸前でレイは詐欺を行う望みを諦めることができたため、この虚偽は大目にみられた。それからは、すっかりあきらめてしまた人間特有の、必要以上の恭順でもって彼はユーリの問いに応じ、次第に、事態の解決方法を彼以上に必死に考えるようになっていった。

無理からぬことである。その理由とは、彼等の話し合いのうちに、『虹つかむ虚空』が『泡沫の園』に持ち込んだ小さな品の予期されていた危険性が小さな二匹の蟲の形で顕現し、その影響が、この品を軽率に扱って目覚めさせたレイ・ジャーロンのみに降りかかっている、という結論が確からしい仮説として浮かんできたことに他ならない。レイはそのような考えを理解しつつ、今の今までどうして忘れていたのであろうかと彼自身を戦慄させたあの電撃的な苦痛を思い出した。

彼は恐る恐る振り返るように、虫どもの置かれた丸机を見やったが、そこには気にしている小さなものは見当たらない。蟲は所詮蟲、全ては気のせいで、捕まったことから現実逃避するためのまやかしであった——一瞬たまらないほどに胸に沸き返る安堵の陶酔でため息をつき、思わず額に手をやって天井の上を見上げ、途端にぎくりとして足元を見やる。言うまでも無くそこには、いつの間にか、床の板目の間に挟まるようにして白い蛆虫のようなやつらがいたのである。

虫達はゆっくりと、謎めいてはいるがはっきりとした口調で、彼等の新たなる従者、レイ・ジャーロンという人者の、お世辞にも性能が優れているとはいえない頭脳がようやく到達した理解が正しいことを保証した。つまり蟲どもに言わせればこういうことであった、レイは彼等に見初められたが故に、彼等の崇高なる目的とやらのために命を投げ打って働かねばならないし、そのためには手段を選ぶべきでもないし、かといって無茶をしてせっかくの機会を台無しにすべきではない。さらには、使命達成まではこの小さなご主人達を身を呈して護ることも当然の義務であることは言うまでも無いことであって——そして、極僅かでも彼等に逆らおうものなら、特殊な契約を結んだ者に対してのみ効力を発揮する激烈な死の苦痛がその裏切りの代償となる。我等種族はそもそも非常に温和で知的であるからして、争いごとも他人の苦痛をも大して喜ばないのだから、お互いのためにも、共感を持って速やかに目的を達成し、お互いに自由という宝を得ようではないか——虫たちは確信に満ちていて、彼等に眼差し

という概念があればきっとそれは冷ややかで狂気じみてもいないであろうし、それゆえに考えを覆すのが一層困難であるような印象を聞き手に与えるのであった。

ユーリは興奮して我を忘れたようになっている通訳を必死に静めながら情報を断片的に聞き出した。そして、種が変われば哲学も変わり、押し付けがましい正義も正当性も、蟲の例を引き出すまでもなく、自分達の種族とて常套手段として用い、多くの他種族を制圧してきたという論説を思い出した。

もちろん当事者のレイは蟲どもの勝手な言い分に抗議し、地団太を踏み、終いには泣きべそをかきはじめて青年に蟲を殺すように哀願した。まさに軽率というもので、その瞬間、ユーリ・フォーシスは、レイの顔や衣類をまくりあげているがゆえに露出している腕や足の皮膚に菫色の斑点が無数に浮かび上がるのを目の当たりにした。ろくでなしの男は手足をばたつかせ、口から泡を吹き、白目を剥いて必死に虚空を引っ掻こうとするかのように指を折り曲げて呪詛を組むような仕草をした。1秒、2秒、…5秒、仕置きにしては長すぎる攻撃の様子から、ユーリはこれが何らかの毒素注入の梵子術であると看取した。

白い幽霊のような動きがユーリ・フォーシスの内側から生じるやいなや、床の虫たちの上空でにわかに、あらためて『一角獣の騎士』が実体となり、その蹴爪が足元の呪術者に触れんばかりになった。被術者はびくりと上半身をのけぞらせ、呼吸を荒げた。だが、先ほどまでは呼吸すらしていなかったようなのである。

自分には関係ないことであり、しかるべき対処法をみつけるまで相手のペースに乗るまいと考えていたユーリであったが、ここで初めて蟲を正視した。そして虚実体を通じて、唇も舌も使わず、心の声で話し掛けた。それが通じるかどうかはわからなかったが、相手が高度の知性を持ち、何らかの梵子操縦の並々ならぬ能力を持つ以上、その受信アンテナを持っていないとも言い切れない。見せ掛けの静寂が、精神世界での論戦の狼煙となった。蟲たちがおあつらえむきの糸電話代わりに、虚実体を通じて応えてきたのである。

「やりすぎかどうか、など、我々の判断することである。この者は既に我等と契約関係を結び、我等の支配下にあり、かつ契約中は友人でもある。無論、術を止めればそれほどの後遺症もないと思われる…が？」蟲は言葉を止めた。ユーリが嘲笑ったのを

聞き逃さなかったのである。

「それはあんたらがかつて寄生をかけていた混沌系の組織液に体を満たす生物種のことだろ。それに比べたら今あんたらの従者になっているこの野郎は、恐ろしく弱小な種族で、その目算は外れてしまっている可能性を否定はできないな。付け加えるなら…」蟲が遮る。

「いえ、結構。ご教授感謝傷み入る。しかしながら、この者が弱小であるからこそ、我等が付け入る隙もあったというもの。目的達成も、この男だけに期待していることではなく、例えば汝、今我等と通じぬ言葉を超えて話し、卑しくもこの男と同じ下等なる種族であるにも関わらず中でも恐らくは傑出しているであろう知性でもって状況を断じ、我等と何らかの狙いを持って交渉に臨もうとしている汝のような者こそは…我等の助けに相応しいのだ」

ユーリ・フォーシスは黙った。先刻から蟲どもが強引に心中をまさぐろうとしていることに気づき、精神域に壁を作って彼等のアクセスを遮断している。彼は、だからどうした、と言わんばかりの冷酷な目つきを、こそ泥に差し向けたようにちっぽけで傲慢な連中に向けたままにしておいた。レイがぴくりと動き、少し白っぽい液の混じる鼻血を出し始めているのを、虚実体が術者にそっと囁いて教えても、見向きもしない。

「脅しには屈しない、ということか。無論、汝には関係の無い男だ、ましてや、どうも汝にとってこの男は敵のようだ。…それで、我等が計画を諦めるとでもお思いか？　では一層に、我等は喜んでこの男の魂をすり潰すまでだ。なぜか？　この男の魂は我等とともに、次元を超越した方法で幸福の野へ向かい、そこから少しずれているが、我等の家であることには間違いの無い空間へと誘われ、永久にそこで我等の下僕となるのだ。我等との盟約に従っていればそうはならなかったものを、盟約違反、使命達成失敗の決して償いきれない償いを永久にし続ける…」

二匹の蟲は声を合わせてこのような理不尽をさも当然のように提示するのであったが、ユーリはそれをまるで聞いていないかのように、全く話の筋とは脈絡の無いような返事をした。

「報酬は？」

「報酬？」

一匹がぽんと跳ねて宙返りを打ち、『一角獣の騎士』の足の上に乗った。ユーリは2匹の区別がつかないまでも、興味本位で、そいつだけに、先ほどの様子からうってかわって、穏やかに、楽しげに話し掛けた。だが、話は2匹同時に伝わっているような実感を得た。

「そう、報酬だ。人に頼み事をしているんだ、当然のことだろう。俺はこいつの命などどうでも良いのだからね。自分の仕事上、何か面白いこと、例えばとてつもないお宝、あんたらにはおよそ関係のない、別に持っていったって大して差し支えの無いようなものでもくれるんならさぁ…　この男のことは全く無しにして、一からビジネス上の話をさせてもらいたいんだよ。全く、俺にとっては折角の、面白い仕事を得るこの上ないチャンスに見えるからね、あんたらとの出会いは」

『家』にあるものは、我等の家具である。我等が使うものでも、所有権が我等にあるというものでもないが、ただ家に帰るということのために、何でそれを差し出さねばならないのか、理解に苦しむのだが。さし当たってはこの男の得る自由、その感動、これこそ、素晴らしい報酬ではないか。緊縛からの解放、わからんかね？」

蟲のどちらかが返答し、二匹同時に薄笑いを浮かべるような印象をユーリに送ってきた。どこで覚えたのか知らない文意を使うようだが、思ったより下衆な連中だ、と彼は感じ、それをちっぽけな奴等に知らせてやるためにそのときだけ心の障壁を外した。

「それじゃあ、交渉は決裂だ。あんたらが処刑してくれるんなら手間が省ける。どの道、俺の店に入ったこそ泥は1週間も経てばここから数里も離れない、視覚を阻害する雲に阻まれた磔刑場で干物になっちまう（彼の名誉のために注記しておくが、言うまでもなく、ハッタリである）んだからな。

さってと。ついでにいうと、俺も店主とはいえ、床の『掃除』くらいはしなくっちゃぁ…」

「…強情な…。思ったよりもばかな男だ。それならそれで！

こいつを殺すまでだっ！」

虚実体が足を振り下ろすより早く、自分達の術策通りに優位性が保たれなくなった

蟲の半狂乱の怒りで、哀れな意識喪失の男はがくがくと身を震わせ、目と口から血を滴らせ始めた。鼻からの出血はすでに滝のようである。

と、蟲に振り下ろされた凶器は寸でのところで直角方向に振り上げられ、青年に上半身を抱かれながら今しも死に瀕する男の頭部を粉々に打ち砕いてしまった。途端に、レイの体から紫色がひいていき、赤が、鮮血が、所かまわずにその周囲を満たし始めた。断頭の執行者も例外なくその洗礼に与りつつ、冷徹な笑みを、驚いて術を解いてしまった蟲達に投げかけた。

「悪いが、考えが変わったのだ。お前達蛆虫ごときに殺されるくらいなら、せめて、同じ人の手で殺された方がこいつも浮かばれるかと思ったのさ。

さて、面倒な話を抜きにしようじゃないか。邪魔者となっていたやつはこの世から消え去ったんだ。俺はあんた等の知ってのとおり、術の手に落ちていないのに、援けてやろうというんだぜ。わかるだろ、対等な立場で、知性を持った種族同士で、暴力抜きで話をしたいんだ。か弱い子供を、気に入らないからといって大人が殴り殺して良いはずが無いのと同じように、あんたらが弱いからといって足で踏みつぶすような真似はしたくない、少なくとも俺はね。俺以外の連中はどうかなぁ…　いやいや、あんた等の言うとおり、如何せん俺等の種族は下等だからね、残念ながらあんた方の安全を保証できないが…」

蟲達は先ほどまでの威勢が嘘のように慌てふためいていた。痙攣し、のたうちまわり、まるでこの交渉の失敗がどちらかの罪であるとなすりつけあうかのように、今まで仲良くつがいでやってきた二匹がつかみ合うようにぶつかり合った。そうこうするうちに何かの弾みでどちらともつかぬ方が虚実体の足の上に乗っかったが、虚実体はもはやそれを受け入れてやらず、うるさそうに足を振って追い落とした。それでも蟲は虚実体に必死に取り付き、叫ぶように念話を送ってくる。

「実は、話し足りないことがあったのだ。我が家、邪悪で屈強な者どもが住みついて周囲の低級な群れる種族の喧騒から護ってくれるあの愛してやまぬ部屋、『夏と川を燃やす披露宴』を作ったのは、我等も知らぬ暗黒時代の偉大なる『白き弦龍の皇帝』であったから、そこには手付かずの財宝が――そうだ、この部屋、汝の家だな？　この空間を眺め渡せばそこそこにありそうな、そして、これらの品を顧みさせないような

真に魅力あるものが眠っているはずだ。あれらなどは見てのとおり、我等に使えるものではない。全部差し上げようではないか。まぁ、得る努力をするのは汝らだが…　どうだ、嘘を看破するのは得意であろう、汝が術で我等の心の奥底を好きなだけ覗くが良い。もしそれができるなら、汝が提示したビジネスとやらに最も適合した意味での記憶を、見ることができるはずだ…」

　ユーリは蟲達に自分がそのような術を使うことができるがそれを敢えてしないことを告げ、相手を信頼することからビジネスが始まるということをその理由として掲げたので、蟲達はすっかり感動した様子で、汝なら必ず我等の使命を果たすだろう、と言明した。途端に青年がそれに不快の意志を示したのに感づき、慌てて、「しかも制約なしで、自分の意志で、である」という言葉を付け加えた。

　店主はおもむろに、彼の寒いときの仕事着である茶色のジャケットの胸ポケットから折りたたまれた紙を取り出し、一々蟲達の同意を得ながら依頼に関する仕事上の誓約書を簡単に完成させた。終わりに、彼等の小さな体に僅かにインクを浸してつけ――無論、蟲は嫌がったが、既に立場的に、強く拒絶できるものでもなかった――捺印させた。「いや、大きなビジネスになりそうだからね。日頃はここまでやらんのだが、…お手数をいただいたね。さ、インクを拭いてやろう。

　さて、そろそろ良かろう、レイ、起きたら良い。目覚めはどうだ？　少しは肝を冷やしただろう」

　ユーリ・フォーシスが指を鳴らすと、虚実体の折れ取れて根元しかない角が、静かな部屋の中で突然柱がきしむような、人をびくりとさせる音を立て、瞬間、この虚実体の名の由来となっている螺旋状の角が青白い輝きを放って見事に復活した。何事が起こったかと唖然として、インクを染み込ませているタオルから体の半分を持ち上げている蟲達は、すぐにぎょっとして事態に気づいた。そのとき既に虚実体は美しい角を持っておらず、やはり無残な名残を額に残しているだけ、『一角獣の騎士』は何事も無かったかのように無表情な馬の眼差しを蟲達に向けているだけであったが、その後方では殺戮されて横たわっていたものが、まるで否死（ゾンビなどのアンデットのこと。『否死』『死めいて』などと形容することもある）か何かのように、よいしょとか痛てぇとか言いながら後ろ手に腕を支えにして起き上がり、頭をしきりに確かめるように、髪を掻いているのである。

状況をうまく飲み込めないレイとは対照的に、『一角獣の騎士』の十八番たる巧妙な幻術――それは単なる知覚的な幻ではなく、現実と非現実の中間の発現、物事の梵子化といったものであるがゆえに、看破は極めて難しいのである――に騙された方の生物は事態を電撃的に解釈し、実際にその電気的信号が小さな体の隅々を痛打したように感じた。すでに身を離しているユーリにはわからない罵倒の言葉を吐きながら、蟲達は下僕の命を奪おうと念術を試みようとした。

異様な気配に気づいたレイ・ジャーロンは恐怖の叫びもまともにあげられず、すっとんきょうに女のような声をあげただけだったが、同時に、虫たちは何か馴染みのあるような、その性質を知り尽くした激痛に神経が満たされ、知覚が一瞬、すっかり麻痺した。術は駄目になっていた。虚実体の見えざる手がそういう彼等の至極当然の怒りを包み込んでやるかのように、蟲達にやんわりと触れる。

「こらこら、ビジネス仲間、お客さん、戦友… 無茶は止めたまえよ。契約書に書いたじゃないか… え、読めなかった？ 冗談じゃない、大きな字で書いてあるんだからね、俺は敢えて声に出して読みはしなかったが。ほら、よく見たまえ、あのつまらないこそ泥への攻撃は、今回のビジネスを色々と面倒にさせるかもしれないという点で、特別に禁じるよう、それを破れば『償い』とやらが生じるように記載したんだ。しかも印を押している、正式な印をね。君達だって、そういう『契約』の効能の絶対性は熟知しているんだろうから、異議はなかろうが…」異議が出つつあったが、優しげな見えざる手が顕現し始め、凶器の、重たく冷たい圧力をひしと蟲達にかけてそれを許さない。ユーリは続けた。

「こういうやり方は汚いだろうか。そういう判断、善悪ってものは、それぞれの立場で判断されるものであるらしい。君達の契約の場合も無論そうで、俺的にはね、こういうモンダキュルリスの文献にある宗教裁判みたいなことは単なる詐欺だと思って好まない。だから君達に使った。この『覆らぬ血判書』を、ね。まぁ、君達がこれの意義を知るか知らぬか、それは俺のほうでは賭けであったのだし、それくらいは許してもらいたいな。

俺は君達の知性も、尊厳も否定しようとは思わない。ただ、俺達は俺達なりに尊厳を主張しているというだけだ。この際、勝ち負けは問題としないことにしよう、お互

いの妥協点として。まぁ、そうでもなければ、俺は種族的エゴイズムによる攻撃意志で、君達を潰して終わりにしてしまうんだろうけれども…」

蟲どもはどうしただろうか。怒りに身を任せて飛び跳ねたり、またお互いにどつきあっただろうか。否、しんとしてしまって、死んだようにタオルの毛の中に身を伏せてしまっている。

いつの間にかレイが近づいてきて、ユーリの前に来ると身を低くして苦笑いを浮かべて下手な礼を述べた。自分が血だらけであることにも気がついていないし、事態をあまり把握できていないため、その間にもしきりに目を右往左往させている。ユーリは薬棚からどんな毒でもある程度その効果を減殺してくれる薬剤と体内の傷を即座に癒す便利な、高価な薬を惜しげもなく一回分ずつ取り出し、レイに水で飲ませた。この極めて有難い効能を持った薬は、見合っただけの苦さも兼ね備えていたから、彼は蟲の呪いを受けたときのように苦しんだ。しかしそれが過ぎ去るとある程度元気を取り戻し、この高度な梵子医術が生み出した夢のような薬剤の効果は店主にあらためて示された。

レイ・ジャーロンは蟲が大人しいのを見ると、「旦那がやっつけてくれたんですね、そうに違いない、いやさすがだ」などと不明にほめそやし、店長が別に喜ぶようでもなく、かえって不快そうにしているのにも関わらず、蟲のとどめをさすのはぜひ自分に、などと勇んでみせタオルをつまんで蟲を払い落とそうとした。ユーリの生の手がこの愚かな男の首根っこを掴まなければ、蟲たちの運命もついにここまでであったであろう。

「お前は、まだ俺にとっては犯人で、盗人で、どうしようもない奴なんだ。出すぎた真似をするとサツに渡すぜ。いいか、よく聞くんだ。この蟲達の望みはかなえてやる、契約に従って、他ならぬお前が、な。俺のほうで力は貸す、特別に。その代わり、お前に接触してあの円盤を売った奴の情報を少しでも掴んだら俺に渡すんだ。いいな？

わかったら早く出て行け。蟲達の呪いの効果は距離に関係ないらしいから、まぁ、逃げるんなら試してみるといいが、命が惜しくなければ。出立は5日後、せいぜい足手まといにならないように鍛錬し、準備しておくんだ。さぁ何してる、早く出て行け

よ！」

ユーリは人が変わったように荒々しい言葉使いと挙動で乱暴にレイを追い立てた。こそ泥は、多少散らかった店内を、悪夢から覚めてふらついているような感覚で、今の時間は内側からしか空かない自動扉の感覚装置を内在する床に体重をかけた。

彼は一度振り返った、蟲達に話し掛けられたがゆえに。小さな、細々としてはいるが、はっきりと意志を示す声で、『契約』によって彼にしかわからなくなっている言葉で――この男、ユーリ・フォーシスという個体名称を持つ存在は、只者ではないのだ。だが、それゆえに、汝も含めた我々が彼に出会ったことは、人生の好機である。我々はきっと目的を果たすだろう、無論、汝も。汝、レイというのだな。レイ・ジャーロン、覚えておこう。本来は単なる運搬業者でしかない者の名は覚えないのだが、もはやそういうわけにもいかなくなったのだから、この機会に、彼の言葉を借りれば、ビジネス仲間、お客さん、戦友として… さて、そうであれば我々の名も明かそう、私がポ・リ・ニ・ジュ。――私はジ・テル・フ。

どちらがどちらかなどわかるもんか、とレイはせせら笑おうとしたが、忌々しいことに、彼にはそれが即座に判別され、名前も、いくら忘れようとしてもはっきりと思い出されてしまうのであった。レイは返事もせず、ユーリへの礼もそれ以上言わずにあたふたと出て行ったが、5日後、間違いなく彼は再びこの店に現れるであろう。身にしみた恐怖が、すでに『契約』以上の効力を発揮していることは誰の目にも明らかなのである。

「順調かい？」後片付けをしながら、小脇に大事そうに蟲のタオルを抱えて、店主はレイ・ジャーロンの気まずそうな苦笑いにそっくりな微笑を、盛り場の出口に立つ主任に向けた。

「お蔭様で、あまりに騒がしいものだから居眠りすることもなくて、なかなかのものですよ。まぁ、半分は終わったというところでしょうか」

夜が白々明け初め、店内の、太陽光を屈折させて美しく店内の調度品を光らせる特殊硝子窓から朝の光が差し込みつつある今、よりによってまだ『半分』とは。ユーリは笑いを作って、それは随分進んだものだ、これから後の事は自分がやろうと思うから君はもう休むべきだ、文書や清算は遅れても何とか取り戻しが効くが、君に倒れら

れでもしたらそれこそ店の一大事であるからね、などと言ってカストールとともに事務所へと姿を消していく。そのあれこれとご機嫌を取る様も、不思議と、先ほどまで彼自身が翻弄し、こき下ろしていた男にそっくりである。偉大な人間とそうでない者との近接点とはこういうものであると、これだけの材料で断じることは甚だ不謹慎であろうけれども。

フロア内は夜の異常事態が嘘のように静まりかえっている。通路付近の7番テーブルに無造作に置かれたタオルには、蟲が二対、大人しくしている。彼等は考えているのだろう、自分達が出会ったことのないタイプの知性に出会ったことを。自らの緑色の血潮に余韻を残す感じたことのない憤慨と、興奮の、沸き立つような快感を。片や事務所ではそれを与えた男が一般的な意味での店主として、実はすっかり仕事を終らせていた砂魚者の優秀さを誉めそやし、途端に眩暈に襲われていたたまれなくなり、砂魚の主任が寝る予定だった布団に寝かしつけられてしまっている。

もちろん、カストール・ナザルスは店主が通常外の『仕事』をしていたのを物音で気づいていたし、そのような専門外のことを手助けせずに彼に任せ、自分は本分を尽くし続けることこそ肝要であると考えたのだ。彼らしい実直な判断というものであろうが、これは別の意味でユーリを救ってもいた。この異才持つ素梵子他象の術士は、見かけ以上に尋常ならざるほど極端に消耗していたのである。何よりも虚実体を多用しすぎたし、これを念話のデバイスにするという思いつきをうまく成功させたはいいが、こういう無茶の副作用として、術費と体力の消耗は一段と激しさを増していたがゆえに、彼は自分が弱ったところを犯人や交渉相手に見せないようにと、レイを早めに追い立てたのだ。蟲を置き去りにしたことも、契約への安心感というよりは、立っているのがやっとというところで、しかるべき処置を行うまでに気が廻らなかっただけであろう。

ところが、この青年の努力にも関わらず、蟲たちは密かに彼の焦りに気づいていた。しかし蟲達はそのことを、勝敗を覆す材料に浪費しようなどとは思わなかった。それどころか、ユーリの機転と胆力を高く評価し、感動し、自分達が彼という信頼の置ける協力者のおかげで確実に愛すべき『家』に帰れることを夢み、久々に外界に出て激しい交渉を行ったことによる疲労を癒すため、眠りについた。ユーリの言ったように、

彼等の哲学や生物としての生きる意義、存在としての尊厳が正しいかどうかは別としても、彼等の『家』に『辿りつきたい』――後に明らかになるが、彼等の場合、『帰りたい』という表現よりもこの方が他者から言わせれば妥当なのである――という切なる願いは紛うことなき確たる意志であり、我々の言うところの、夢、希望、愛、といったものと完全に同価か、それ以上であったようなのである。

蟲のもたらす前情報などから予想される踏破の段取り、目標、報酬の分け方は実に手馴れたような形で、ほとんど議論の余地なく決まってしまった。そうこうしているうちに出発の日が来て、あのこそ泥が今度は医者に見てもらう患者のごとくに再び現れ、臭い卑屈さをユーリの仲間達にも提供したのである。ユーリ・フォーシスをリーダーとする踏破家団『純なる甲羅』の4人に1.2人のゲストを加えた一行は『夢幻の祠』を使わず、早足の竜車で横道街道を軽やかに抜け、途中、カールシュトで宿を取り、矢木街道は馬車を変えて一気に抜けた。

やり始めた頃はどこまでも足だけが頼りだったと、ユーリはほとんど嘆くように顔をしかめて見せたので、仲間達は笑ったし、呪いの恐怖に縛り付けられて大変な仕事に駆り出されている男はお愛想の笑いを浮かべながら、それを贅沢な悩みだとあつかましく指摘した。しかし水準の高い各々の地位を得ている踏破家達はこれに対して何も言わず、ただ一様に、今の冗談が半分は本当で、活動初期に経験したような苦労もひっくるめての踏破家業であるが、既に日々を本業以外のことにも費やさねばならない自分達にはそのような醍醐味を味わい尽くしている暇もないことを寂しく思った。

一方、幼虫そっくりの賓客達の考えは、こうであった。体内の細菌類にとっての自分達のような小規模の生物、または自分達にとっての汝らのごときに、世界とは全くスケールの点で汝らを凌駕しているのだから、こういう重大な使命を持っている時など、急いでいるときにはなるだけ文明の利器に頼るべきだし、汝らがそのようなものを利用できる地位にあることは全く祝福されるべきことである――蟲どもはアーテル・ネゼスの手に抱えられた赤い銅製の小箱から飛び出さんばかりに主張し、対照的なレイの考え無さと禄でもない身分を非難した。もはや一角獣の騎士も通訳代わりの宿主も必要なく、小箱に敷き詰められた質の良いふわりとした絹地の下に入れられた、

たった一枚のちっぽけな薄緑色のメダルが彼らの言葉を誰にでもわかる後語に変えている。これは言語翻訳の優れた力を持っており、使い捨てタイプであったから、蟲に興味を持ったフィル・ネゼスは複数枚を知人の研究室から購入し、二匹の気を損ねない程度に、盛んに彼らに話し掛けていた。

この博識な男にすれば、謎めいた相手が『寡故意虫（カコイムシ）』といった生物種であると分類し、その特性を並べ立てることはそれほど難儀することでもないのであったが、それでも実物を見て、それと知的な交渉を行えるなどは、この蟲が多少の寄生的隆盛を得ていた数万年前ならともかく、今のような時分には滅多にないことであろうから、彼流の片付け方で言えば、やはり『貴重なこと』なのであった。実際に話してみると寡故意虫は言うほどに知性が高いわけでもなく、知らないことがあまりにも多かったし、知的順応力もそれほどではない。全く失礼な言い方を使えば、ただ知性のプライドだけがある、といったところで、三千年程前に——当時既にこの寄生生物種は自然の裁定によって世界からほとんど姿を消していた——彼らが『バン・ト・ルケッド』の中で生まれ、その内部の噂話しか知らないということも徐々にわかってきた。間違えば彼ら自身を貶めてしまうかもしれないような情報も、彼らのプライドを撫でながら裏をかいていけばわけもなく聞き出すことができる。だから知識欲にかられた学者は、古い時代の見聞を遺跡が『建物』であった当時からの内部で過ごした者から、普通の知的共存可能生物種以外の視点で聞くことができるということにだけ満足する以外になくなり、初日を過ぎるのを待たずに、もう蟲への興味を失ったようだった。

『噂の遺跡』にご招待、とは感激ですね」フィルは肩をすくめ、久しぶりにメンバー召集をかけたリーダーと、その隣に座る妹にいつもの柔和な笑いを見せて窓の外に顔を向けた。蟲たちはそれを言葉どおりにとって尊大に反身になったが、アーテル・ネゼスは車内の微妙な光量で桔梗色に変わっている髪を後に束ねる仕草をとりながら、ちらと前席のユーリを見やった。

「ああ。きっと、面白いことになるさ」ユーリ・フォーシスは窓枠に頬付えをつきながら、兄妹の視線を受け流し、それを蟲の方に向けさせた。彼女の左隣に座る大柄な剣士カーン・アルブは、ほとんど狸のようにして眠っているようだったが、旧来からの不思議な親和力で、ユーリの前方が彼の前方になるのは必然のようなものであった

から、全く疑いすら挟んでおらず、ただ外面的には興味の無さをアピールしていたのである。

およそ生物の住めるような地上の空間における生存競争の策略の一つ、その広範を同種で埋め、お互いを妥協で認め合うことで他種を排除していくといった方法は、我々人類のような脆弱で自我の強い種族が好んで採る手法である。地球とクナウザスとのそれを比較して異なる点を挙げるならば、前者がほぼ完全に単一種であったことに対し、後者では全く異なるような種族がそれぞれに一定の地位を得て混ざり合っていることであると指摘できようが、地球の同系種の中の『人種』といった細やかな分類が深刻な闘争や文化の多様性の原因となっていることや、クナウザスの全く違う生物種達が同じ『知性種』や『人類』としてひしめきあい、同胞であることを疑わぬことを考え合わせれば、この二者の差とは単なる程度の問題、すなわちいかに高次元的バランス感覚をその世界が有しているかにかかっているのであり、そのスケールが相対的に大きくなるだけで、どちらにおいても本質は不変であるということが言える。

一方、このようなごり押しの作戦を取らない、群を知らぬか嫌う種族というものは、最初から好んで、もしくは追いやられるようにして、危険の潜む地や辺境、深層のような場所に住まいを求めた。このような『群』と『孤高』の大枠の分類が明確に検出されるようになるのはちょうど後語が話されるのと同じで、虚神の台頭による神話期に頻発した天変地異の賜物であることは言うまでもない。『孤高』の方は独自性を守ったし、多くのものが、それをできるだけの力強さを秘めていた。それが、『群』を牽制し続けたし、現在の多様性とそれを保つバランスを育む一要因でもある。

現在では、幾たびもの衝突を経て、『孤高』と『群』の境界線は混ざり合った。その一例が、多数派の文化圏に残り、少数派の文明の遺骸として、その危険性と謎めいた部分で、僅かにかつての独自性――貴族性といってもよかろう――を証言している、遺跡と呼ばれる施設である。だがそれも、多数派の自我による征服欲が生み出した踏破家という人種によって脅かされ、いつかはもぬけの殻、観光名所の一つになっていくのであろうか――馬車と宿場と問わず、時代の現状について耳年磨になった蟲達は盛んに論じ、真理を得た被害者ぶって昔を忍んだ。

ユーリは彼らに、笑って言明した。少なくとも踏破しなければならない事件や場所は多すぎて、しかも多くの場合が難所といえるようなものであり、梵子的なエナギー資源の豊富なクナウザスではほとんど見向きもされないような化石燃料のように、それらは減ろうとするうちに新たなものが補充されるだけの時間が経ちすぎてしまうだろうから、貴君等のご心配には及ばない――しかし自らも少数派である二匹はこのような一般論では満足せずに、放言し、喝破しようと必死になり、それが、退屈しがちな長旅の慰めになった。

カセドリア大河から分け前を貰う、現地で『ゴロツキ川』とか呼ばれるバックロビーツ川が、プラコーニ州セリオストの北西部沿岸付近の地形を作った張本人である。この川は生き物のように不気味な性質があって、洪水を防ごうとしたり、付近の街が復興しかけた頃にそれを意地悪く突き崩すように、小川とは思えない底力で暴れ狂うのであった。おかげで住みやすそうな平地にもかかわらず、『石拾』といった職業の者の宿舎が点在する以外は何も無い。

『純なる甲羅』御一行は、こうして川の乱流が気まぐれに形成した極小規模な中州の地下に、階段を使って降りることも、地下遺跡を発掘することもなく、ただその地上にポツリと立つ鳥居のような組木の間を、蟲の唱える合言葉とともに通り抜けるだけで到達していた。寡故意虫はその合言葉をかつて聞き知ったのだが、彼らにしてみれば、自分の家の鍵を得ることは極当然、何の不思議も無くそうなるべきことであった。彼らの魂は生まれながらにして常に『家』とともにあり、種としての存続を保証する安寧を得るための活動はいつしか重大な『使命』という名の誇りとなった。

時空と因果法則を越え、彼らと『家』は互いに求め合っているかのような幻想を彼らに抱かせ、それは梵子的な意味において現実性を主張し得ることとなる。すなわち、他の種族から客観的に言わせれば、彼らのいう『自分の住むべき家』とはそもそものところ全くその所有権を彼らに譲り渡すべき理由を見出すものではなかったが、寡故意虫達は独自の哲学で、このような考えを現実を表面でしか見ることのできない浅はかな知性の産物と評して相手にもしない。そして特殊能力による契約で内面から攻撃する強力な梵子呪術を脅しに使い、『運び屋』を得て、これに寄生して目標を達してきた。ところが一度住み着くとそこでじっとして、死んだように数百年生き、いつの間

にか干からびてしまうだけのようだ。家を見つけるまでが一番大変で、かつ、彼らにとっての青春でもあるのであろう。

寡故意虫の重大な使命とやらの達成率は決して高いものとは言えなかったらしいが、それでも蟲達によると、彼らはそこに到達するには誰が最も適当かを、本能的にある程度察知することができる。二匹の寡故意虫は、踏破活動の邪魔にならぬよう、今は身軽なユーリのバックパックにしっかりと繋がれた箱の脇から僅かに顔を覗かせるばかりであるが、計画を失敗させぬように大人しくしていなければならないことは重々承知しつつも、主義主張を述べ立てる欲求を克服することはなかなか難しいらしかった。新居予定の遺跡に入った興奮のせいか、彼らは前以上に自分の胸のうちをさらけだしているようだった。おかげで、煩がりながらも、踏破家達と盗賊崩れの男は寡故意虫の哲学というものを存分に味わい、多少はそれに馴染み深い興味を覚えつつあった。『純なる甲羅』には人者ばかりが偏って集まっているが、それは偶然的な運命による出会いがそうさせただけであって、彼らの面々はむしろ、同種族以外の者との交流が盛んで、分け隔てなく他の文化にも理解を示す素養がある。アーテル・ネゼスはリーダーの背中に問い掛けた。

「いろいろな遺跡を見てきたけど、ここは随分と材質の良い石でしっかりと作られているし、まるで掃除人がいるかのように小奇麗ね。あなた達の部屋が決まったら、お宅には、お呼びいただけますかしら？」

「残念だが、貴殿のようにお美しい方といえど、一度確定された我等が安住の地に故意に望んで踏み込ませるわけにはいかない。しかしながら、かつての友人として、我等の家の掃除をしてくれるといった自主的な活動ならば、我等がここに住む者達の行動を制限しないことで安息を得るように、断る理由はないし、むしろ、奨励されるべきことであろう」

ユーリは失笑を隠し切れず、アーテルにたしなめられた。しかしフィル・ネゼスは、蟲たちの言うことには一々耳を傾けず、例えば全く種の容姿が異なる彼らが人の女性に『美しい』という言葉を使ったのはどのような理由なのか、単なるおべっかとも思えないし、もしかしたら、寡故意虫は他の文化に影響されやすい知能をもっているのかもしれない——といった、研究的なことに頭脳を働かせていた。

彼らが家を得て個体の安息を得ることはわかったが、生殖活動はその後どのようになされるのか、フィルは旅中に言葉を変えて何度か問うたが、自己の安全のみを重要とする彼らにとって、そのようなことは全く興味の無いことであるだけでなく、これは実に注目に値する、本能で生きる蟲らしい傾向であるが、それらの種としての活動、次世代という、自己存在そのものにはほとんど関わりのないようなことについての知識や考えは本当にほとんど有していないらしく、これに関する答えは曖昧であり、本物に出会ってもなお、何一つわからなかった。もちろん今や彼の興味は遺跡そのものにすっかり占有されていたし、謎を謎のまま残しておく精神的余裕が十分にあったのである。

ところで、いつもながら口数の極端に少ない自由騎士殿――カーンは踏破業の活躍を通じ、王宮から特別な勲章を得ている――はともかく、メンバーの中で限定された幾人かしか話題に昇っていないが、それは、あの小うるさい男を意図的に無視したからそうなったわけではなく、彼がいつに無く大人しく、粛々として『純なる甲羅』の後に付き従っているからである。蟲が彼を罵ったとき、弱りきった反抗心を口に出すのがせいぜいというものであった。レイ・ジャーロンはすっかり怯えきっていた。『夏と川を燃やす披露宴』は予想に違わず踏破難度の高い遺跡であって、すでに探索者たちは何度も中程度以上の怪物に出会っていたし、そういうとき、レイは当然のごとく全く戦力にならないのであるが、せいぜいバカなことをやって邪魔にならないでくれるのが踏破家達にはありがたかった。ただし、美しい碁盤目状の模様が目を引く硝子のように透ける材質の壁向こうに、まばゆいばかりの財宝が積まれていて、探索者たちがリーダーの指図によってこれに関わらずに通り抜けようとしたときを別とすれば、である。

目を見張って生唾を飲み込んだレイは、再び物言わずに踏破家達の後ろについていくかにみえたが、そろそろと後ずさりし、碁盤目の、穴の開いたところから手を伸ばして銀色に輝くペンダントのようなものを一つ掴んだ。彼はそれを引っ張って穴からゆっくりと腕を抜いたが、宝物は壁にひっかかって僅かに音を立て、ソナーのようなユーリの耳を捉えた。振り返りざま、ユーリは怒声を浴びせて腰の短剣を引き抜いたので、盗賊はすっかり度を失った。

「ちょっと、まってください、旦那！　たかが一個なんです、もちろんお渡ししますとも、でも、一個なんですよ、こんなにあるのに…」

「馬鹿野郎、そうじゃない、そいつを放して避けろ！

…ちっ、『一角獣の騎士』っ！」

さしもの愚者も、他の４人の急激な動作で何かを悟り、ゆっくりと、自分が手を突っ込んでいる壁を見た。そこには、財宝の主、巨大な竜族の端くれ、混沌の時代の終わりと共に生活圏のメジャーから追いやられ、このような奥深いところで安息を得ているような恐るべき戦闘力を持った生物種が、幻影でもなんでもなく、確かに鎌首をもたげていた。そして透明な壁が、本当にそこに何も無かったかのように音も無く消えゆき、壁に面した、レイのいるあたりの通路が闇に閉ざされていくように、踏破家達のいる場所からは見えた。通路が遮断される寸前で、虚実体を出しながら飛び込んだユーリ・フォーシスだけが間一髪でその中に入り込み、一瞬遅く、カーン・アルブは仕掛けによって生じた壁に体当たりする格好になり、空しく絶叫した。

「ユーリっ！　畜生、ここはだめだ！」

「このような閉じ込め型の構造には、必ず別の、メンテナンス用の裏口があるはずです。廻り込みますよ！」

フィルは言うが早いか、冷静沈着な彼らしくも無く危険を顧みずに走り出し、アーテルとカーンもそれに従った。歩く生物図鑑のような彼が一番、あの怪物の恐ろしさ知っているからであろう。久々に実感する仲間の危機になりふり等かまっていられないのは、３人とも同じであった。

『純なる甲羅』の３人が、急いでいるときに限って現れるような邪魔者にてこずっている頃、ユーリ・フォーシスは、火炎の息を吐き、財宝をかき回しながら大暴れする焦鋼竜を相手に、防戦の一手であった。財宝の様子を見た瞬間から、これらが最初からここにあったのではなく、部屋の主人に襲われた犠牲者の遺物の積み重なったものだと看破したのであるが、さすがのユーリも、これほどの怪物が住み着いてるとまでは考えていなかった。

このように、ある長生きの生物が遺跡の住人となるのには様々な理由があるが、こ

の場合は、宿泊料代わりに遺跡の守護を担っているのであろう。それは別に意図せずとも、彼らのようなスパンの長い一生を送る者達が無類に欲する眠りを妨げたり、用いるわけでなくともその所有欲によって積まれる財宝に手をつけようとすれば、愚かな侵入者に自分の意志で襲いかかるのであるから、建物の所有者とはお互いに有用な協定が自然と結ばれるような格好になるわけである。

『一角獣の騎士』が繰出す幻惑と優れた運動神経による回避力も、このような足場の悪く、狭い部屋ではあまり役に立たず、しかも、ただ震え、泣き叫んで走り回るだけの役立たずを守るために陽動で自分に攻撃をひきつけようとするのであるから、全く分が悪いことこの上ない。仲間達が発想を変えて上階に戻り、以前に保留にした分かれ道を通って、2階吹き抜けになったこの部屋にバルコニーから飛び降りたとき、ユーリは相当に傷つき、特に、肩口から背中に受けた傷口は、重厚に編まれた鉄鎖の肩当が身代わりになってくれなければ、致命傷になっていたかもしれない。ユーリはレイだけでなく、背後の蟲をもかばっていたのであろう。

「何だってこんなヤツを連れてきたんだ!?　阿呆め」

カーンはフィルの術によって予め強化された武具を使い、悪態とともに果敢に竜に挑みかかった。その問いの答えは、当のユーリにも良くわからなかった。こんな足手まといの男を、責任を取らせる、という意味だけで連れてきたのは全く軽率であった。俺も、商売に気を取られて少々イイ気になりすぎていたか、とその時彼は自問してみたが、後には、もしかしたら蟲の意志が自分に働きかけてそうさせたのではないか、という結論に至った。

それには、反省を前進の力に換える生粋の踏破家には似つかわしくない言い逃れなどではなくて、充分な意味での、以下のような事態が根拠となっている――援軍の来訪に小躍りしたくなったのは一人で頑張ったユーリだけではなかったから、レイ・ジャーロンはいい気になって、安全圏に早く到達しようとアーテルの傍に駆け寄りつつ、手を前かがみにぶらつかせ、宝石のいくつかを懐に納めていった。

カーン・アルブの剣戟に傷つき、これほど体格的には差があるちっぽけな種族が頑強に炎や牙を弾くことを信じられないでいる竜の横目にその光景が飛び込んだとき、怪物の苛立ちは頂点に達した。焦鋼竜は突如標的を変え、唾液を吐きかけようとする

かのように炎を口の中で練り、プッ、と音を立てて弾丸のように射出した。そのとき突然、こういうことが起こった。

神官戦士に抱きかかえられて応急の治療を受けながら、多量の失血と仲間が来てくれたことによる安堵で気の抜けたユーリの、背中から外して腹の上に抱える袋から、蟲が一匹、何らかの術による障壁を張りながら手まりほどの球体のようになって、火の玉よりも凄まじい勢いで飛び出し、成すすべなく死に面した男の前に踊り出たのである。蟲は強力な弾丸の威力を相殺し、落下した。誰しもが、標的も、怪物も、もう一匹の蟲ですら、我が目を疑う出来事だった。

レイは我に返ったように、ふらりと一歩踏み出し、足元の誰かの骨を砕いたが、次の瞬間には宝石を全て取り落として一目散に蟲の亡骸にかけよった。

「――ジ・テル・フ…」彼は我知らず、人の中では彼しかわからない蟲の名前を口にした。なぜこれほどまでに悲しみがこみあげてくるのか、恐怖も欲望も吹き飛んでしまったのかもわからずに、怪物を無視して、ちっぽけな男は焦げた蟲を手に抱えていた。しばらくの後、男は周囲をはばからずに慟哭しはじめた…

「お取り込み中失礼しますがね…！」フィル・ネゼスは攻撃の術法を惜しみなく打ち、無防備になったレイへの次弾を封じつつ彼に近づき、引っ張るようにして神官戦士の傍へ押しやった。その代わり、レイのお守りを彼女に任せ、戦線にユーリが復帰した。彼もまた、惜しみなく術費を行使し、全力で敵に当たった。

「本当に申し訳ないのだが」ユーリ・フォーシスは、腕に巻いた包帯をさすって利き腕の動きを確かめつつ、蟲を振り返りもせずに断りを入れた。「予定変更、今回の探索はここまでのようだ。ここを抜けたら拠点に戻る。その後探索するかどうかは、再度判断させていただく…」

蟲は、ユーリの密かに予想していたとおり、それを全く構わないと保証した。この寡故意虫、ポ・リ・ニ・ジュは、求めていた『故郷』が、まさにこの、仲間が死した墓のような一室であったことを感じていたから、この部屋を掃除してもらえれば、それで十分だったのである。

命の危険や偉大な目標に立ち向かっている踏破家達の脇で、そのようなものからすれば真にちっぽけで顧みられることも理解されることもないような、小さな小さな、

種を超えた情による悲しみに支配されたまま、やはりちっぽけな存在の人間が唇を噛んでいる。それがどうしたというのだろうか。まぁ、どうやら、蟲が彼の命を身を呈して救った瞬間、『契約』で繋がっていた精神域を伝って、ジ・テル・フが密かにこの情けない男に感じていた友情が、彼の心象に流れ込んだようなのである。

それはそれだが、あちらでは、剣豪が竜の金属のような鱗を剥ぎ取り、虚実体が事実を湾曲して放つ消蹴連撃や様々の派手な攻撃術法が炸裂しているというのに、我等が物語の目は、さしずめ、何かのはずみで映像を送りつづけるカメラを落っことしてしまったのを幸いとして、映す者の掟からは無価値とされるが、僅かの思慮に値するものがあるかもしれないという予感を漂わせるものに、ほんの一瞬、胸襟を開いているといったところであろうか。どのみちすぐにまたカメラは取り戻され、描写されるべきものが中央に来るようになるのが物語の理というものなのだから。

さて、涙に塗れて、情けないというよりもほとんど哀れさを放散して座り込む男の脳裏には、急に、かつての場面が想起されてもいる。いつか、若いときのことであるが、溺愛して目をかけていた小獏を、獏嫌いの仕事仲間に命じられて、しぶしぶ虐待したことがあった。獏は二度と彼の目の前に現れることは無かった。こんなことで泣いても、他者には笑われるだけの、他愛ないことである。

もっとも、自分がいかに愚かといえど、愛玩動物に服を着せ替えするようなたわけた真似ばかりはしたことがない、と彼は頭を振る。ただ、本当の理解だけが、獏と自分には、ずっと続いていくことのできた信愛が、そこにはあったはずなのに、それは永久に失われたのだ。どうしてそうならねばならなかったのか、皆目見当もつかないことである。蟲の友情も、そうであった。『家』に関する梵子的な概念のように、目に見えるような交流による友情の構築にその既成事実が先立ってしまったのか。それとも、ジ・テル・フがレイの中にある小さな愛の得失体験を何らかの方法で感得し、運命論者として共感したからなのか。理解に想いは先立つ――ただ、一つの体感できる紛うことのない事実として信愛だけがその断片的時空の中にあった、という事実を目の当たりにしたとき、我々を含めた客観論者に理解できるような理由ではないにせよ、彼の俗っぽい心の中で何かが、おずおずとではあるが変わりはじめていることだけは、傍らで不安そうにしているアーテル・ネゼスにも感じられる。

蟲が、敢えて女性神官にはわからない言葉で、レイ・ジャーロンだけにいつになくゆったりとした口調で話し掛けた。

「我々、ジ・テル・フと我は、同じような存在。そしてやはり、僅かに違っていました。

彼はあなたに、目的の達成には邪魔となるような、感じてはならないような情を、強く感じていたのでしょう。彼がそれゆえに死したのは運命で、生命は、運命に従うのが理というもの。とりわけ我々の種族は、それを強く感じます。ジ・テル・フがここで死んだからではなく、彼はここで友人のために命を終えるためにここに来たし、我、ポ・リ・ニ・ジュは彼の魂を『家』に住まわせるために、ここを住処とし、生きていくのです。

『君』よ、君にも君の運命がある。我が友の死が、命の花火が、君に運命を見つめる機会を与えたというなら、我々が君に出会ったことも、きっと無駄とはいえないのでしょう」